

『きみは不敵なアフロディテ』

著：春原いずみ

ill：鶴

瀬川は屋上への階段を昇っていた。

「多岐先生なら、煙草吸ってくるって言って出ていかれましたよ。たぶん、屋上じゃないでしょうか」

多岐を探してカンファレンス室に顔を出すと、パソコンで何やら検索をかけていた伊東が教えてくれたのだ。

屋上への扉を開くと、強く吹き込んでくる風が頬を打った。

「うわ……っ」

屋上には、たくさんのタオルやカバー類が干してある。その清潔な石けんの香りが一気に押し寄せてくる。ドアを開けきり、軽く目のあたりをかばいながら、瀬川は広い屋上を見回す。

「あ……」

まず目に入ったのは、強い風に翻る白衣の裾だった。そして、煙草の小さな火を包むように守る白い両手。ドアがぱんっと閉じる音に、彼はふわりと顔を上げた。

「ああ……」

多岐はふふっと口元だけで笑うと、くわえていた煙草を足下に落とした。軽く踏んで火を消すと吸い殻を拾い上げる。

「どうしたの？」

ポケットから出した携帯灰皿に吸い殻を入れると、多岐はふわふわとした独特の口調で言う。

「どうしたって……借り物を返しに来たんだよ」

瀬川は首にかけていたステートを外して、差し出す。

「……サンキュ」

「どういたしまして」

多岐はおっとりと答えて、ステートを受け取り、白衣のポケットに収める。

「自分のは見つかった？」

「……医局にあった」

「お間抜け」

さらりと言って、多岐はくすつと笑う。

「月曜日はやっぱり調子出ない？」

「誰のせいだと思ってんだよ」

思わず言ってしまうと、瀬川ははっと口を閉じた。そのまま仏頂面をして、ゆっくりと多岐に近づく。

「あれ、誰のせいって……僕のせい？」

多岐はきょとんとしている。

「どうして？」

「……どうしたもこうしたも……っ」

瀬川は不機嫌に言うと、フェンスに寄りかかっている多岐に並んだ。すれ違う形でフェンスに肘をつき、下を見下ろす。ここから見下ろせるのは、入退院の入り口だ。大きな紙袋を抱えて入っていくのは、たぶん入院患者の付き添いだろう。やはり大きな荷物を抱えながらも、どこか嬉しそうに出てくるのは、退院の患者だろうか。

「……晃一が仙台に帰った」

瀬川はぼそりと言った。

「ふうん」

多岐が軽くなずく。言葉が途切れた。風が吹く。さらさらと髪をなびかせて、多岐は静かにどこか遠くを見つめている。

「……もうこっちには来させないつもりだ」

瀬川は、無意識のうちに左手を口元に持って行って、軽く爪を噛んだ。子供の頃からの苛立ったときの癖だ。

「そう」

多岐はまたさらりとうなずく。

「……それだけか」

瀬川が言うのに、多岐はゆったりと顔を上げた。

「それだけって……他に何か？」

多岐はくすりと笑う。

「彼は瀬川先生の弟さんでしょ？ 僕の弟じゃない」

相変わらず優しくおっとりとした口調で語られる冷たい言葉。

「でも、あんた……っ」

“晃一を……あの単純馬鹿を骨抜きにしちまったのは、あんただろうがっ”

瀬川は思わず振り返る。音がしそうな勢いで。風がいつそう強く頬を打ち、痛みすら感じて、僅かに涙がにじむ。

「あんた……」

「何？」

多岐は穏やかな表情で、こちらを眺めていた。

彼には独特の、フェロモンとでも言うべき物質を放出する器官がついているらしい。それが溢れ出しているときの彼は、まさに無敵で、どんな人間でも力づくで自分の虜(とりこ)にしてしまう。しかし、そのスイッチがぱちりと切れてしまうとおっとり優しい、どこか中性的で物静かな顔になるのだ。その不思議な二面性にも、瀬川は大きく惹かれるものを感じる。

「いや……」

瀬川はずっと視線をそらした。

「……確かにそうだな」

「そう」

多岐はまたふふっと笑い、さらりと視線を流す。切れ長の美しい目が一瞬奇妙な輝きを帯び、すぐにすうっと逃げていく。

「お……っ」

見た目よりずっとしっかりとした肩を掴もうとして、瀬川は手を握りしめる。

“騙(だま)し……なのか？”

目の前にいる相手……一度だけ疑似恋愛もどきの関係を持った相手の肉親と一夜

の関係を結んで、こんなに涼しい顔をしていられる人間がいるだろうか。涼やかで優しい顔をしていられる人間がいるだろうか。

“いや……こいつならあり得るか……”

確かめて……確かめて、答えるだろうか。この得体の知れない美しいモンスターは。

“いや……はぐらかされるのがオチだな”

いやしかし、何よりも瀬川にとって耐え難い屈辱は、晃一とのことを問い詰めることが自分がどれほど多岐に引き寄せられているかを、彼の前にさらしてしまうこととイコールであることだ。

「どうかしたの？ そんなに見られると、顔に穴開きそうなんだけど」

はっと気づくと、多岐がこちらを見つめている。

「穴か……どっかに開けてやれたらいいんだがな」

瀬川は右手の人差し指を伸ばし、親指を立てた。他の指を握り込んで、作るのはピストルの形。

「ばん」

抑揚のない口調で言い捨てて、瀬川はくりと多岐に背を向けた。

本文 p144～150 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>